



TITLE:

静脩 Vol. 22 No. 1 (1985.9) [全文]

AUTHOR(S):

CITATION:

静脩 Vol. 22 No. 1 (1985.9) [全文]. 静脩 1985, 22(1)

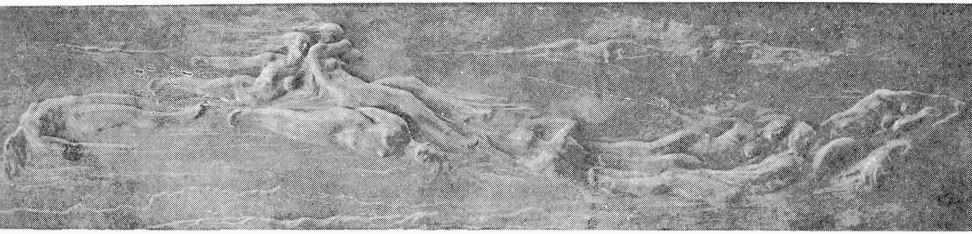
ISSUE DATE:

1985-09

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/65983>

RIGHT:



静脩

1985年9月

The Kyoto University Library Bulletin

Vol. 22, No. 1

わが師 図書館

文学部教授 越 智 武 臣

停年まで1年有半、指折り数えてみると、吉田生活ももう40年を越えてしまった。旧制三高、軍隊、少時の新聞社時代、留学期間などを除いても、やはり40年に近い。この間、私のように西洋史などという学問を選んだ者の運のつきというのか、そのカバーする時間と空間の幅は、正直言って気の遠くなるような思いであった。その雑多なテーマを考えれば、誰を師とするわけにもゆかぬ。また師となれるはずもない。だから、「君の師は」と聞かれれば、これはもう図書館、京大図書館であった、と答えする以外言葉が見つからない。

このわが師図書館についてだけは、したがって、思い出も多い。そもそも学問の振り出しは、今は亡き文学部陳列館——なんと懐しい名だ——の史学科閲覧室、つまり、かつてあそこにあった二階南隅の部屋と階下の図書収納庫。頃は敗戦直後から昭和35年、つまり史学科が学部東館に移転するまでの約15年間、私はこれに師事した。食うや食わずの日々であったが、本当に楽しかった。旧制高校で書名だけ聞くにすぎなかった書物が、2年間という軍隊の空白期を終て、そこに現にあり、手に触れられる。あの感激は忘れられない。

あの頃、これは、わが史学科の年中行事であったが、毎年夏休みがくると、埃りまみれになって図書整理というものをやった。助手が音頭をとつ

て大学院や学生まで手伝う。これを4～5年やると、まあ本棚の配列、どこに何という本があるかは、真暗がりでも手さぐりで取り出せたものだ。仕事終って慰労にもらうアイスキャンディーが、また格別であった。その頃は、学生からみると、図書室に坐ってられる方は威厳に充ちた存在で、背表紙、表紙、裏表紙と、おもむろに撫でさすり、一息入れて貸与給わる。あとは悠然と句作を続ける。またこういう人もいられた。「学生がフランス語が出来るのに、わしが出来んとあつては恥だ」。こう言って、もうとくに50を出ていられたろうが、せっせと日仏会館に足を運んでいる、と聞いた。この人、惜しくもその後間もなくみまかれたが、実際は旧制高校でフランス語を教えていた学校は少なかったはずで、学生のフランス語の能力はどうであったろうか。

以上陳列館閲覧室についてのひとつふたつの思い出だが、昨年7月、陳列館70年惜別の会には、なつかしい人200人はいたろうか、雨天に拘らず中庭を埋めつくした。この陳列館、生れかわれば博物館というらしい。ここで思うのは、戦後の学制でよくみかけるこの改名のことだ。言葉の意味とは、その言葉が人間心理に喚起する刺激であり、これに連動して現われる映像だと意味論は教える。とすれば、五万とある博物館という言葉は、今後私になんの映像を喚起するだろうか。奇

妙なことに、われわれ大正二桁の人間は、小学・中学・高校・大学と全部その名を奪われた。改名された。人間、肥ったから、背が伸びたからといって名が変わるものでもあるまいに。名だけはのこして欲しかった。感傷かも知れぬが。

文学科、哲学科のあった学部東館の図書室には、時折りは行ったが、さして必要なかった。研究上ここでわが師と仰がねばならないのは、私にとってはむしろ法経の図書館だった。その図書の豊富なこと、さすが大学の図書館だと感心したものである。私が探す研究書なら、まずどんなものでもあった。機関銃よろしく（年が知れるが）、小気味よいタイプの音で叩き出してくれたあの長目の借用書を何度おし頂いたことか。それはまたあの頃、昭和20年代から30年代半ばにかけて、先生、若い研究者含めての、学部間交流の暖い思い出とともに今もこの胸内にある。

最初買った洋書、といっても新版書、この想い出も鮮烈だ。あれは昭和26年、1947年プリンストン版の『トマス・モアの書簡集』だった。ラテン語のむずかしい代物だった。しかし、初めて丸善が、わが研究室に現われるようになったのは、あの頃からではなかったろうか。但し、3,225円の手価にはおったまげた。この年私は助手になったが、その時の月給8,000円くらいではなかったか、といま妻はいう。まず間違いなからう。貧乏世帯の本代は——これは今もって変らぬが——よく覚えているものである。こんな事情だったので、買った本、手に入れた本には、読むのに気合いがはいった。図書館を師と仰がねばならなかった理由の一つに、今では想像も出来ない書物の入手困難と払底があったということはいえる。東京の同学なども、わざわざ1冊の本をみるため、あの戦後の不便な東海道線を乗りついで、ここまで来たものである。逆も言える。

最後に、付属図書館についての想い出。私はここである快哉を叫んだことがある。あれは昭和22年、卒業を翌春に控えて、卒論の作成中、少時歴史学界では、世を挙げてマルクス、ウェーバーに草木もなびく時代であった。テーマを英国史に選んだ私は、しかしどうも学界主流のウェーバーを

下敷きにした学説に納得がゆかぬ。しかし、これにはどうあってもウェーバーの挙げる史料に就かねばならぬが、むろんわが国で、ましてや占領下の日本で、これが入手可能だとは思われない。思い余って、それでもと、ある日のこと、全学の図書の総覧ができるという大図書館——当時われわれはそう呼んでいたように思う——のカードをめくっていた。

ところがである。一瞬われとわが目を疑ったのだが、まさかあるとは思ってなかった人名があるではないか。ウェーバーの直接挙げる史料ではないが、その史料の著者の自伝があった。私は過去何百冊の本の背を撫でたか分らぬが——念のため「撫でた」のである——、こんなに欣喜雀躍したことはなかった。卒業論文は書けた。しかし、このとき以来、私はこのテーマに関する限り、主流派からは煙たい奴とみなされ今日にいたったが、学問をやる者としては、まことに光栄この上ないことであった。

これよりさき、私は卒論に一つの賭をしていた。丁と出るか半と出るか、もし結論私の予想する通りなら、一度世の中をみるため大学を去ろう、と。そして私は暫く去った。他愛ない青春のパトス、しかし、それにつけても想い出すのが、今の標準では、かならずしも立派とはいえぬあのコンクリート壁のかつての大図書館、そしてそこで発見した1冊の本のことである。なお後日談だが、このテーマについては、その後農経の図書館でも、まさかと思っていた書物に出くわした。いつの日、誰が買っておいしてくれたのだろう。いまさらながら、この大学の、それが伝統というのか、蓄積というのか、ありがたさに頭の下がる思いであった。人間、年を経ると、昔食べたものがなつかしいという。書物も同じ、若いころ読んだものがなつかしい。停年にでもなったら、もう一度初心に帰り、この卒論の続きをやってみたい。それにしても、まったくのところ、京大図書館、図書室こそが私の恩師であった。

もうこれ以上いうまい。ところは吉田山麓である。どうもさっきから、あの兼好の『徒然草』の一節が、私の頭に去来して仕様がなないのである。

「大方聞きにくく見苦しきことは、老人の若き人
に交りて、興あらんと物言いるたる」。

京都大学文献複写相互利用制度の発足について

昭和60年9月9日（月）より、附属図書館及び
部局図書館（室）の文献複写相互利用制度が発足
しました。

この制度は、従来自然系4学部2研究所で行わ
れていた複写による文献の相互利用を全学的に拡
大し、利用者へ便宜を図るために附属図書館及び
部局図書室の関係者を中心に協議を重ねてきたも
のです。

利用者が所属する部局に所蔵されていない文献
のコピーを希望する場合、この制度により所蔵部
局から資料を持出さずに複写が出来ますので、利
用者は1往復ですむことになります。このほか、
この制度の要点は下記のとおりです。

1. この制度は校費による利用に限られる。
2. 部局図書室単位で、この制度に文献複写の
依頼館及び受付館、あるいはそのいずれか
として参加する。校費の支払等に用いる予

算口座を同時に登録する。

3. 利用希望者は所属する部局又は学科の図書
室から利用書の発行をうける。
4. 複写は利用者自身の責任の下に行う。
5. 経費は附属図書館で講座等予算使用上の口
座単位で集計を行って各部局に通知し、年
1回経理部で部局間の予算振替を行う。
6. 利用料金は部局ごとに設定する。
7. この校費移算のための複写データ処理等の
事務は、附属図書館が行う。

注) 附属図書館での利用は、上記の利用書記入
による利用と、複写IDカード（部局から
の申出に応じて発行）による利用と二通り
の方法のいずれでも可能です。

詳細は、附属図書館閲覧課 相互協力掛（内線
2638）又は部局図書室へお問合わせ下さい。

教養部図書館本年4月より開架室図書の借用手続きを 電算化—それを機に大幅にサービス改善

教養部図書館は附属図書館の協力をえて、本年
4月8日から開架室の図書約32,000冊の借用・返
却手続きを電子計算機で処理するようになりました。
そしてこれを機に下記のように借用手続きと
利用条件の一部を変更して、サービスの改善をは
かりました。

借用手続きが非常に簡略化され、借用冊数、借
用期間が大きくふえたので、全学の学生・教職員
各位のせいぜいのご利用をお待ちしています。

記

1. 借用手続き

- 〔1〕『京都大学附属図書館（・教養部図書館）
利用証』（附属図書館と共通）で借用手続

きを行います。

- 〔2〕従来の『図書帯出券』制度は廃止しまし
た。

2. 借用冊数、借用期間

		借 用 冊 数		借用期間
		開架室図書	書庫内図書	
学 生	新	5冊以内	3冊以内	14日以内
	(旧)	(3冊以内)		(7日以内)
教職員	新	5冊以内	20冊以内	90日以内
	(旧)	(10冊以内)		(90日以内)

3. 月例の図書出納事務休止日

〔新〕 毎月末日（日曜日の場合はその前日）

〔旧〕 毎月1日（日曜日の場合は2日）

注：出納事務休止日も2階閲覧室（300席）は利用できます。

「黎明期の新聞展」を開催

毎年10月には「新聞週間」が行われ、標語の募集をはじめ、多彩な行事が催されております。

附属図書館では、この週間の行事に合せ、一般になじみ深い「新聞」をテーマとしてとりあげ、展示会を開催することとなりました。展示資料は附属図書館に所蔵している「新聞文庫」の中からつぎのサブテーマにより選択して展覧に供します。

期 間：10月14日（月）～19日（土）

午前10時～午後4時

場 所：附属図書館展示ホール（3階）

展示内容：A コーナー展示〈新聞前史〉

1 瓦 版

2 錦画（絵）新聞

B 一般展示

1 維新前後の新聞

（1）翻訳・翻刻新聞

（2）慶応四年・明治元年創刊の新聞

（3）我が国最初の日刊新聞

2 地方新聞の発生

3 京都の新聞

4 号 外

（1）明治期

（2）大正期

（3）昭和期

5 新聞の付録

6 資料類

「経済学古典文献集成展」へのご案内

きたる11月14日（木）から16日（土）までの3日間、附属図書館展示ホールにおいて「経済学古典文献集成」をテーマとして展示会が催される。これは経済学の古典を通じて経済学の形成過程を

理解してもらおうという趣旨のもので、経済学部が主催、経済学会、附属図書館が共催する。約7.80冊が出版年代順に展示され、それぞれに解題を付す予定である。

今年度「調査研究」の課題決まる

今年度から附属図書館調査研究室において館長の委嘱による調査研究がおこなわれることになったが（「静脩」Vol.21, No.2 参照）、昭和60年度の研究課題と研究員が以下のように決まり、委嘱された。

（1）調査研究事項『大惣本』目録解題作成

調査研究員 文学部 日野 龍夫助教授

委 嘱 期 間 昭和60年4月1日～昭和61年

3月31日

（2）調査研究事項

1 『大惣本』目録解題作成

（主として古代文学を中心として）

2 公家旧蔵書の調査

調査研究員 文学部 上野英二助手

委嘱期間 昭和60年4月1日～昭和60年

3月31日

国立大学図書館協議会賞を受賞

廣庭基介氏の「京大『大惣本』購入事情の考察」

「大学図書館研究」24号（1984年5月）に掲載された広庭基介氏（附属図書館閲覧掛長）の論文に第20回（昭和60年度）国立大学図書館協議会賞が与えられた。

「大惣本」とは江戸中期から明治中期にかけて、名古屋で営業をつづけた貸本屋大野屋惣八店（略して大惣）の旧蔵本をいう。一般の貸本屋が絵草子や読本など比較的軽くやわらかい内容の冊子類をおもに扱ったのにたいして、大惣のそれは仏書、神道書から儒学、心学、医学、本草、天文、暦学、歴史、地誌、茶道、文学にいたる広範な主題を含んでいたのが大きな特徴であるとされている。もちろん、その中心は浮世草子であるとか、歌舞伎、浄瑠璃の脚本であるとか、読本、俳諧書であるとか、江戸時代の庶民文学であったろうことは貸本屋という業種から容易に推察できるのであるが。

その大惣本の大きな集団（3,673部、13,094冊）が京都大学附属図書館に納本されたのは、館が創設された年、明治32年（正式の登録・受入れはおくれて3年後の明治35年）のことである。京都大学には一般の蔵書と区別される、ある特定の主題のもとに集められたコレクションは数多くあるが、この大惣本こそ、特殊コレクション第一号といえよう。

筆者は明治32年当時のわが国において、こうした大惣本の購入はどのような意味をもっていたのか、また、コレクションとしてどのように評価す

べきであるか、という観点から出発する。そして売却にいたる経過（明治30年～32年）についてだけでもさまざまな異説がなされてきた事実を各種の文献によって例示していく。この間、坪内逍遙、水谷不倒、井上哲次郎、上田万年、吉川弘文館（吉川半七、林縫之助）、大野屋（武田伝右衛門）などが介在し、幾筋もの買却交渉のルートがあって、複雑な様相を呈する。結局、大惣本の中心的部分は東京（帝国）大学、京都（帝国）大学、東京高等師範学校および上野の帝国図書館の四図書館に分割して納本されたことが跡づけられていく。

筆者は次に京大の附属図書館に保存されている図書原簿により納本の業者、その日時、価格などを確定し、さらに例えば柴田光彦氏「大惣蔵書目録と研究」などの援用によって、上野の帝国図書館、東京高等師範学校などに納本された大惣本の内容を照合していく。こうして筆者の論文の眼目の一つである、「選定にたずさわった井上、上田両博士は先ず東京大学のため良書を抜き出した」とか、「したがって他の三図書館に納本されたものはあまり価値のない雑多なものが多かった」となどという俗論が全く根拠のないものであったとして退け、両博士の選別は極めて公平であり、高度の専門的配慮をもっておこなわれたはずであるとの結論をひき出している。文献の博搜と現場での実証が美事に合致した成果であるといえる。

東京大学文献 情報センター タスク・フォース業務報告

附属図書館 木 村 祥 子

東京大学文献情報センターへタスク・フォースとして出向中の木村祥子さん（附属図書館参考調査掛）から、その日常業務を伝えるリポートが寄せられ

てきているので、その主要な部分を紹介させていただく。なお、タスク・フォースとしての今年度の主要課題は「学術雑誌総合目録」（学総目）欧文編の

全国調査準備作業である。ここでは木村さんのレポート（4—6月）の中から主要な部分を抄録させていただいた。

〔学総目・欧文編の準備作業について〕

① 欧文編を編集する中での問題。

予備版の作成、収録誌の範囲、書誌データ・所蔵データ収集の方法とその確認（オーセンティケーション）、ニュー・ジャーナル書誌情報の取入れ方、適用すべき目録規則と配列などが当面の検討課題である。KJ法*により問題点を一項目ごとにカード化した後、共通の問題をさらにグループ化することで、問題の所在と全体的な業務の概要を把握することを目指して作業を進めている。このような作業を通じて、(1)学総目のデータ項目および書誌記述が適正であるか、(2)目録規則としてAACR2を用いて現在の書誌データを修正した場合、どの程度まで修正を必要とするか、が主要な問題点として浮び上ってきた。

② サンプル抽出によるデータの検証。

42件のサンプルを抽出し、その所蔵機関（東大・農、東大・医、東工大、一橋大）におもむいて実地調査をおこなった。これはAACR2を使用して現在の書誌データを修正した場合、その修正はどの程度まで及ぶかを調べることを主目的とするものである。この調査からえられた結論はこの作業レポートとは別に、「現学総目書誌データ修正——調査のまとめ」において述べておいた。

③ サンプル抽出データをAACR2で目録をとった場合の結果はどうであったか。

(イ) 学総目の現データには、冒頭の冠詞が本タイトルの記述から省かれたものが若干ある、(ロ) タイトル関連情報が記述されていない、(ハ) 責任表示のとり方が非常に難しい、(ニ) 巻次、年月次がまぎらわしく、月次まで記述されていない、(ホ) 出版者、出版年がない、(ヘ) 特殊資料表示（microfilm, microfiche）はデータとして入っているが、資料の数量表示はない、(ト) 注記のなかみを限定しなければ、この部分のデータがかなり増える、などの点が観測された。

④ 学総目・欧文編で採用すべき項目と規則の検討。

これまでは学総目データとAACR2の比較をおこなってきたが、さらに広範囲にLCRI, NDL, ISDS, NC案の各項目ごとの書誌記述の相違点を明らかにしようとして、(イ)「雑誌目録規則（書誌記述総則）比較表（未完）」、(ロ)「書誌単位（記入単位）比較表」、(ハ)「データ項目の収録範囲比較表」を作成した。これは同時にAACR2のどの項目を採用するかという目安にもなる。次に「データ項目の収録範囲比較表」をもとに、現学総目のデータ項目が少ないことを認識し、「必須書誌データ項目案（ミニマム・レベル）」を作成する。

* KJ法 川喜田二郎氏の提唱するグループ討議法。検討する問題をさまざまな角度から自由に、かつ具体的に討議し、その要旨を簡単にカード化する。こうして作成された数十枚のカードを内容によって、数グループに集約し、さらにグループ間の関連づけをおこなうなどのプロセスを繰り返しながら、問題の所在を明確にしていく方法。

〔学総目・欧文編の5、6月の進捗状況〕

タスク・フォースは三つのグループに分かれて作業をおこなっている。

① 第1グループ。データベースの事前調整。

イ) LC MARC(S)のニュー・タイトルの取り込みとファイルの作成。現在利用されている学総目欧文編は1980年の調査にもとづくものであるから、それ以後の新規タイトルをどのようにして把握するかが問題になる。そこでLC MARC(S)よりの取り込みが試みられた。事前調査として、K社の販売目録とLCのヒット率、NCとLCの重複率を出してみる。この結果ニュー・タイトルのかんりの部分がLC MARC(S)でカバーできることがわかった。

ロ) キリル文字の原綴化。学総目データベースは自然、人文社会、補遺版ともにローマ字に翻字された形で入っているが、これは原綴で表示されることが望ましい。人文社会、補遺編では最終部に〈別編〉としてまとめられ、(≡0126≡)のような番号が与えられているので、これによって抽出する。自然科学編はこの番号がないので発行地から検索抽出する方法が考えられた。作業を速

やかにおこなうため翻字から原綴に変える略語登録の方法を採用することにした。また原綴化は変換ソフトによっておこなわれる。

② 第2グループ。データシートの設計、印刷。

第2グループの作業細目の主なものは次の通りである。

- イ) 館別所蔵リスト設計
- ロ) 館別所蔵データシート設計
- ハ) 書誌データシート設計
- ニ) データ調査マニュアル原案作成

これらの作業を統一的におこなうため「欧文編3編記入要項比較表」,「記入要項と AACR2 との比較表」を作成し利用している。また欧文編出

力仕様検討会議に参加する中で、データシート設計もほぼ完了に近づきつつあり、今後は参加組織略称, OCR の関連, プリンターの問題などが検討課題になるものと思われる。

③ 第3グループ。参加組織調査。

第3グループが担当する作業は大別すれば,

- イ) 所蔵館の確認および欧文誌数調査リスト出力
- ロ) 個別版磁気テープの仕様案作成
- ハ) 調査資料の封入, 発送

である。イ)については、この作業にともなってデータシートの枚数, 予備版の必要冊数の把握, 配置コードの確認, 所蔵誌数の点検などの基礎的調査がおこなわれなければならない。

昭和59年度 学部学生別開架図書貸出統計

区 分	文	教 育	法	経 済	理	医	薬	工	農	教 養	医 短	計
59/4	冊 256	冊 60	冊 269	冊 103	冊 473	冊 72	冊 23	冊 387	冊 79	冊 408	冊 7	冊 2,137
5	584	165	580	221	888	94	32	910	141	1,264	24	4,903
6	636	174	578	242	879	72	56	1,032	154	1,258	35	5,116
7	612	153	482	231	748	91	64	975	212	1,037	60	4,665
8	274	49	147	63	255	32	7	320	52	203	30	1,432
9	611	94	493	199	629	92	57	931	271	1,392	63	4,832
10	749	146	596	298	1,060	110	58	1,734	267	1,678	60	6,756
11	809	193	727	229	837	102	30	1,190	181	1,383	67	5,748
12	802	198	690	274	966	111	60	1,139	230	1,672	60	6,202
60/1	988	199	649	420	909	82	36	1,078	209	1,975	49	6,594
2	938	178	970	342	1,151	108	91	2,176	370	2,750	57	9,131
3	528	61	212	119	605	76	61	493	87	1,228	36	3,506
計 (A)	7,787	1,670	6,393	2,741	9,400	1,042	575	12,365	2,253	16,248	548	61,022
構成比 (An/An)	% 12.8	% 2.7	% 10.5	% 4.5	% 15.4	% 1.7	% 0.9	% 20.3	% 3.7	% 26.6	% 0.9	% 100
学生数 (B)	人 546	人 127	人 883	人 442	人 653	人 491	人 166	人 1,985	人 627	人 5,671	人 504	人 12,095
貸出密度 (A/B)	冊/人 14.3	冊/人 13.1	冊/人 7.2	冊/人 6.20	冊/人 14.4	冊/人 2.1	冊/人 3.5	冊/人 6.23	冊/人 3.6	冊/人 2.9	冊/人 1.1	冊/人 5.0

(学生数は昭和59年5月1日現在の学部学生および聴講生である。)

昭和59年度 特別図書購入報告

図 書 資 料 名	巻 号	刊 年	備付場所
Vigiliae Christianae. A Review of Early Christian Life and Language. (キリスト教的夜警〈初代キリスト教の生活と言語〉雑誌)	V.1-37	1947-1983	文 学 部
Bibliographie Cartographique Internationale. Covering years 1946/47-1975. (国際地図製作文献資料書誌)	V.1-28	1949-1979	〃
Revue de Linguistique et Philologie Compree. (比較言語学・文献学研究雑誌)	v.1-48, & Gen. index	1867-1916	〃
景印清代起居注咸豊朝, 同治朝			〃
国宝及び重要文化財指定の日本仏教彫刻・仏教絵画関係資料			〃
Education. (教育)	Vol.24-30	1903/4-1909/10	教育学部
U.S.Bureaf of Education. Bulletin. 1919(1-87), 1920(1-36, 38-48), 1921(1-53), 1922(1-50), 1923(1-28, 30-60), 1924(1-12, 14-40) (合衆国連邦政府教育報告集成)		1919-1924	〃
National Reporter System. Atlantic Reporter, 外。 (全米判例大系)		1984-1985	法 学 部
A Legislative History of the Securities Act of 1933 & Securities Exchange Act of 1934. (1933年証券法及び1934年証券取引所法史)	1-11	1973	〃
Uniform Crime Reports for the United States. (U.S.FBI.) (合衆国FBI 統一犯罪レポート)	1930-83.	1984	〃
Third United Nations Conference on the Law of the Sea: Documents. (第3次国連海洋法会議文書集)	5-6	1984-1985	〃
The Poor Law Commissioners. Annual Reports. 1st-14th. (救貧法調査王命委員会年次報告)	1st.-14th.	Repr. ed.	経済学部
The Poor Law Boardl Annual Reports. 1st-23rd, 1848-1870/71	1st.-23rd.	Repr. ed.	〃
Leviathen; Zeitschrift fur Zozialwissenschaft. (レヴィアタン 社会科学雑誌)	1-10	1973-1982	〃
The Philosophy of David Hume. 18 of the Most Important Books on Hume's Philosophy. (ヒュームの哲学)	1-18	Repr. ed.	〃
International Bibiographie der Zeitschriften Literatur.	19	1983	図 書 館
Leonardo Da Vinci. Corpus Studi Antomici L.D.V.	11	1983	〃

京都大学附属図書館報「静脩」Vol.22.No1 (通号79号) 1985年9月30日発行・編集: 静脩編集委員会 (責任者 附属図書館事務部長) 発行: 京都大学附属図書館・京都市左京区吉田本町・電 大代751-2111(内線)2611~2646